

<仕事を楽しむ>

JJF(日本ジュエリーフェア)に行く。日頃 IJT(国際宝飾展)などで出展の身。見学は自身を客観的に見られるので気づきもある。以前、ドイツ、アメリカなどのジュエリーショーを見学、出展した折のことも久しぶりに思い出す。8月のNYは酷暑。会場は冷蔵庫の中のような寒さ。黒ジャケットとTシャツの重ね着。周囲の女性は糸の如きのドレス。どうしたの?風邪?と不思議そう。初対面同士もまず、男性は女性の何かをほめる。ベルギー人の76歳という彼女のお洒落を見るのは毎朝の楽しみだった。そのお洒落、ジュエリー談義も仕事のプロローグなのかも。欧米人対日本人のジュエリー展示会での違い。欧米人は和やかに明るく周囲と接しつつもしっかりビジネス。対する日本、仕事で来ているのだからしっかり成績を残さねば…。国民性の違いではあるが“ヒトは明るいモノには引き寄せられる”。そして、シマダにとって最も有り難かったのは、BIZ の作品の印象を率直にしっかり語ってくれたこと。エレガントで社交的な会話に続いてしっかり仕事の印象も話してくれるのは成熟した社会を感じる。



<歴史好きの本好き>

最初は山岡宗八の[徳川家康 全13巻]だった。どこにもその本を持参。次が塩野七海の[春の戴冠]。ルネサンス期の画家、ボッティチェリの話。フィレンツェの路地を鐘楼に向かって歩くボッティチェリ。ロレンツォ メデイチは自宅の回廊に若い芸術家を集め芸術を語り、やがてルネサンスは花開く。同じ塩野七海の描くカエサルという男。紀元前の時代、ろくな衣類、靴もない時、極寒のアルプスを越え、時には奴隷も重用(当時は異例)。3000年より前とも思われない施政。妻と複数の女性を悲しませることもない。すべてがカッコイイ。そして友人から回ってきた大量の単行本。政治をも変えるスパイは知的頭脳と強靱な精神と身体能力を併せ持つ。自己はひたすら出さず、どのような状況にも水のように馴染みスパイはすべてカッコイイのだ。シマダが余りに熱中するので本をまわした友人に“おい、それは本の中のオトコだぞ。”といわれたことも。やはり本は楽しい。そして何千年の中を生きてきた人間というのもいとおしい。



<大人の自立した女性>

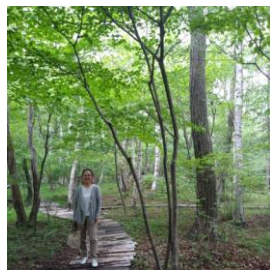
同業の友人。ほんの時折電話がくる。そしてこれもポツと長い便りが来る。最近は何米大陸から旅の手紙。基本、海は飛行機で渡るが地上では乗らない。ひたすら地を這う。数か月して電話がきた。帰ってきたけど、今度は仕事しなくちゃ、と。それで終わらない。でもトシだから歩ける内にヨーロッパ大陸に行く。これも電車とバス。シマダおもわず、アンタはツヨイ!!!。あら、私フツーにその地が見たいのよ。かつてフランスに留学し、今は都内超一等地タワマン上階に住む人である。しかも日頃のはんびりと話し、意気込む姿は見たことがない。出張から浜松町に着いたら電話が鳴り、あなた、今どこにいるの？そこにおいて、今すぐ行くから。意味不明。当時は親しい程の人でもないのに驚く。ホントに間もなく来て、ちょっとウチに寄って、と徒歩で着いたのは広い角部屋にアールのついたガラスに囲まれた一室。そこは新橋と銀座一丁目辺りの境、そこからは遥か下に蟻のようにヒトが動いている。甲府の地面に住むものには、コレが都会のタワマンというものか！と、つい口をついて出たのは、アナタ、これ何憶？ ウーン、タッチの差で一番上がダメだったから〇オク。やはり豪快な人だ。

<清里は楽しい>

この涼やかな遊歩道は幹線道路に面した“八ヶ岳倶楽部”の庭。自然林に見えるが設計して作った庭、陽射しも柔らかか。やはり別の幹線道路を入ったところにある“飾屋倶楽部”という店。高齢女性がヨーロッパで買いつけた全てがユニークな雑貨は何時間でも遊べる。

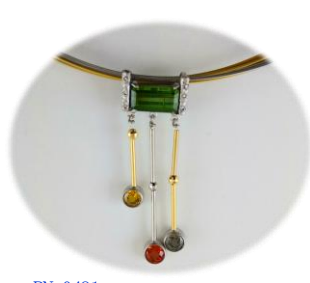


女性の足型グリップの象牙の杖



R-0449

ブルートパーズは指から斜めに跳ね上がり
パールの安定感がさわやかキュートなリング



PN-0491

グリーントルマリンから
流れる線の先 揺れるトパーズ
軽快モダンな一品